



みんなで守ろう文化財 -1月26日は文化財防火デー-

奈良県の法隆寺で大修理が行われていた昭和24年1月26日の早朝に火災が発生し、金堂壁画の大部分が焼損しました。

この火災を契機に、「火災などの被害から文化財を守ろう」という世論が高まり、昭和30年に1月26日が「文化財防火デー」と定められて今年で68回目を迎えます。

近年では、フランスのノートルダム大聖堂や沖縄県那覇市の首里城跡復元施設において火災が発生し、貴重な文化遺産が相次いで失われました。

彦根市には、彦根城をはじめ多くの文化財が市内各地に残されています。

長い歴史の中で先人たちが守ってきた貴重な文化財を火災等から守り、将来に継承するためにも、次の事項を守りましょう。

- ▶喫煙マナーをしっかりと守り、文化財の近くでのたき火など火災の原因となる行為は止めましょう。
▶放火対策として、文化財の周りに燃えやすい物を放置せず、整理整頓するようにしましょう。



彦根市消防出初式 表彰式の縮小および式典中止のお知らせ

彦根市消防出初式は、消防人の年頭に於ての決意表明の催しであり、例年、表彰式をひこね市文化プラザで、式典を彦根城大手前保存用地で実施していますが、令和4年は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、昨年に引き続き、表彰式は規模を縮小して実施し、式典は全て中止しますのでご理解いただきますようお願いいたします。



▲規模を縮小して開催した昨年の表彰式



1月1日(土・祝)~2月2日(水) 「老いを言祝ぐ-能の世界から-」

古来、日本では、多くの年を重ねた尉や姥は、神に近い存在とされてきました。年老いた神が世を言祝ぐ「翁」、相生の松の精の老夫婦が登場する「高砂」など、めでたい能の演目を通して、祝うべき老いの世界を紹介します。



▲中啓金地蓮菜図

■スライドトーク 【日時】1月8日(土)14:00~(30分程度) 【解説】当館学芸員 【場所】講堂 ※無料(観覧料は別途必要) ※当日受付(先着35人、受付は13:30~)

- 【休館日のお知らせ】1月5日(水)、2月3日(水)
■1月6日(木)~2月1日(火)は、展示ケース改修のため一部休室します。
■2月2日(水)~同4日(金)は、展示替えのため一部休室します。

関連講座「能にみる老いの世界」

能には、「翁」や「高砂」、「卒塔婆小町」など年老いた神や老翁、老女をシテ(主役)とする様々な演目があります。これらの内容とその役柄、使用する面や装束を通して、能における老いの世界を紹介します。

【日時】1月15日(土)14:00~15:30 【場所】講堂
※資料代100円(観覧料は別途必要)
※当日受付(先着35人、受付は13:30~)

令和4年1月1日(土・祝)~同10日(月・祝) 「博物館の正月飾り」

博物館では、能舞台に注連縄と鏡餅を供え、新年を迎えます。また武家の正月行事である貞足祝に倣い、井伊家当主の甲冑には、太刀と弓を備えた具足飾りを施します。新春を彩るめでたい飾りをご覧ください。



▲具足飾り

チケット情報

Table with ticket information for Hikone City Cultural Plaza and Mizuho Cultural Center, including dates, times, and prices for various performances.

好むと好まざるとに関わらず、誰にでも必ずやってくる「老い」。皆さんは、老いにどんなイメージを持っているのでしょうか。古来、日本では、多くの年を重ねた老夫や老女は、豊富な知識や経験を積み重ねた年長者として尊ばれ、人々の願望である長寿を体現しためでたい存在と考えられてきました。加えて、さまざまな説話集や寺社縁起などに多く見られる、神や仏が老人の姿で現われるエピソードが示すように、その存在は、人間の智慧や寿命を超えた神に近いものともされてきました。



▶写真1 白色尉



▶写真2 悪尉

このようなイメージが端的に表れているといえるのが、老体の神を主役とする祝言性の高い能の演目、そして、その役で使用する能面です。主に正月などの祝賀の際に上演される「翁」は、能が成立する以前の古い芸能を受け継いだ特別な演目で、主役である翁と、その後に登壇する二番叟という2人の老体の神が、舞を舞い、天下泰平・国土安穩・五穀豊穡を祈念し、世を言祝ぐとい

うもの。この翁の役で使用する面が、白色尉(写真1)です。鬚を切り離して飾り紐で結び切鬚、長い顎髭、白い飾り眉、への字型にくり抜いた眼が特徴で、その表情は、大いなる祝福を授けるのにふさわしい、晴れやかな笑みに満ちています。一方、「大社」や「白髭」などの演目において、世を祝福する老体の神の役で用いるのが、悪尉と呼ばれる種類の面(写真2)です。悪尉の「悪」は、荒々しく強いことを意味し、金輪を嵌めた眼や歯は、超人的な力を持った人ならざる存在であることを表しています。この面は、鼻に瘤状の隆起があることから鼻瘤悪尉の名があり、眉間に皺をよせて前方を睨みつける恐ろしい表情は、神に相応しい威厳を感じさせます。どちらも老体の神の面ながら、一方は柔和、一方は峻厳と、正反対の印象を与える2つの面。そこには、寿福の象徴としての老い、あるいは叡智を備えた、畏怖すべき存在としての老翁という、日本人が抱いてきた、老いに対するイメージが反映されているといえるでしょう。(彦根城博物館 茨木恵美)

Vertical banner for 'ときの手箱' (Time's Treasure Chest) exhibition, 305th issue.